

2001年の本。

「現実には複雑である。安易な善悪や是非の議論を受け付けないほど複雑である。その複雑性に屈服し、経済性、利益優先、効率追求、集団主義などの単線型の教条主義を便宜的な原則とすることになったまま、それが便法にすぎぬことを忘れ、便法への懐疑を圧殺するようになったというのが、現代日本の「無責任の構造」の底流なのである。」——なるほど。

脆弱な良心は良心たり得ない。

「あのとき自分が心配したとおりになった」という良心は、そのときに表明され実施されなかった限り、良心と呼ぶにふさわしいとは言えない。

JCO 事故以外にも、「無責任の構造」の雛形はたくさんあるに違いない。証券会社の不祥事。不良債権の抱え込みと帳簿操作。主要銀行の倒産と政府管理。外銀への「身売り」。乳製品会社の製品不祥事。自動車メーカーの多年にわたるリコール隠し。老舗百貨店の事実上倒産。警察が、刑事事件の被害者家族からの捜査依頼にきちんと対応していなかったり、届けを改ざんしていた事件まで明るみに出てきた。ここへ来て膿が一度に噴出した感がある。JCO の臨界事故も、じつは、この種の一つにすぎない。JCO 事故を含め、どれも「無責任の構造」のよい教科書になることであろう。

JCO 臨界事故による被曝状況

事故の経緯と背景に入る前に、事故の概要を見ておこう。

事故が起こったのは、一九九九年の九月三十日である。株式会社ジュー・シー・オー（JCO）東海事業所の転換試験棟で警報が吹鳴したのが午前十時三十五分だった。三人の作業員のうち、二人はあきらかに重篤な被曝をしていた。壁一枚を隔てた場所にいたチーフは比較的症状が軽かったようである。JCO から科技厅に「臨界事故の可能性あり」とする第一報が入ったのが十一時十九分である。現地では、核燃料サイクル開発機構や原研那珂研究所が事故支援のための村策本部を設置する一方、東海村が三五〇メートル圏内の住民を避難させ、茨城県が科技厅の助言により一〇キロ圏内の自宅屋内退避を勧告した。

・・・

結局、二四人の JCO 社員が、三人一チームとなり、一チームが最短で二分、最長で十分の作業をリレーのようにつなぎながら、この作業を行うことで、臨界を終息させた。

周辺住民で放射線による被曝があったと推定されるのは七人である。

JCO 職員では、作業に従事していた二人は、一八～二〇グレイ当量、一〇～一二グレイ当量という、世界の原子力事故史上でもまれな重篤な被曝をした。彼らは造血組織を破壊され、全身に火傷を負い、高度な医療措置にもかかわらず、それぞれ、十二月二十一日、翌二〇〇〇年四月二十七日に亡くなった。そのほかに五六人の JCO 職員が有意な被曝をしている（計画被曝の二四人は別）。

・・・

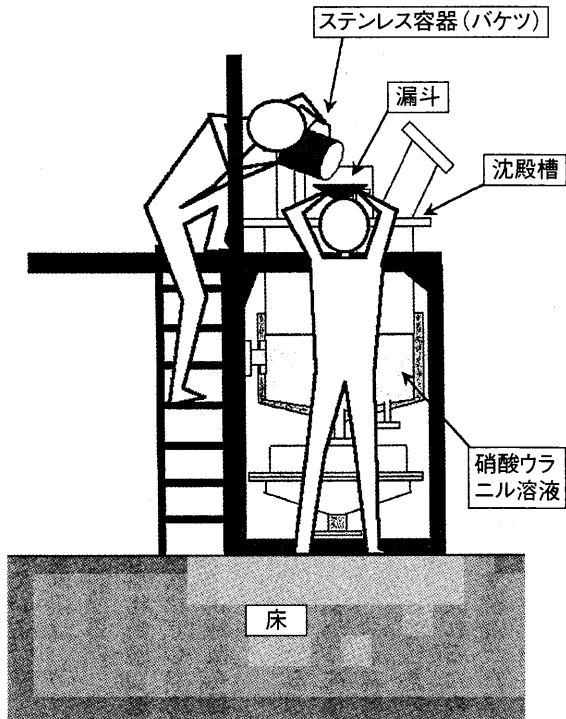
また、科技庁は二〇〇〇年二月三日に、**JCO に対する事業許可を取り消している**。臨界事故の結果、ただちに事業許可を取り消しにした例は海外でも事例がなく、海外の専門家からは、その迅速さに対して驚きの声があがっている。

・・・

事故からほぼ一年が経過した二〇〇〇年十月十一日、茨城県警は当時の JCO 東海事業所長、元製造部長、元計画グループ長、元製造グループ職場長、元計画グループ主任、元製造グループ副長（事故当時作業にあっていた三人のチーフ）を業務上過失致死と原子炉等規制法違反の容疑で逮捕した。おもな容疑は、国に変更届を出さぬまま、社内の保安規定に反した違法の手順を採用し、それを維持し、かつ、**職務上必要な教育措置を怠った容疑**であり、六人は容疑をおおむね認めているとされている。

国内の原子力施設の事故で、同容疑で逮捕者が出たのははじめてである。

● 図2 JCO事故発生の状況



事故は、沈殿槽と呼ばれるタンクに、七バッチ以上のウラン溶液を入れたことによって起こった。
(質量制限は一バッチ＝ウラン賞味量 2.4kg)

注文が途絶

えた三年間、この施設は使用されることがなく、また、この間、大幅なリストラ（後述）が行われたため、これらの作業を担当していた人が去り、この作業に関する現場的な知識すら失われることとなった。

・・・

九九年九月に、三年ぶりの注文があった。

この製造作業にあたることとなった「スペシャルクルー」の三人は、いずれもこの作業ははじめてだった。経験者はおらず、限られた情報でこの作業を行わなければならなかった。

この作業の手順を検討するうち、スペシャルクルーのチーフは、精製後の八酸化三ウランの溶解を、貯塔ではなく沈殿槽で行うほうがよいのではないかと考えたらしい。沈殿槽のほうが溶解速度が速く、貯塔を用いるよりもさらに時間の短縮が期待できたという（ウラン加工工場臨界事故調査委員会資料3・11）。

事実、これら会議の議事録が、実際に話されたとおりの議事録と、科技庁に提出するための議事録とに別々に作成されていたことがわかっている。そして、科技庁向けの議事録からは、この工程変更の部分が削除されていた。

工程変更を承認してはいけない人たちが「ノー」を発しなかった「無責任の構造」によってこの事故は起こった。

一九九三年をピークに、JCOの経営が悪化し始める。軌を一にして、この年、この高濃縮度燃料の再溶解に、ステンレスバケツが使用されるという「工夫」が導入されることとなる。このとき、科技庁、原子力安全委員会には工程変更の届けをしないまま、この新しい工程を開始することが決められるが、この工程はすでに臨界の危険を含むものであった。

さらに、工程には「工夫」が追加され、そのたびに、臨界安全がより強く侵されるようになっていた。リストラが開始された九六年には、貯塔を再溶解に使用し、しかも、貯塔の形状制限を利用して、質量制限違反の七バッチを投入するという工程が編み出されている。そして、今回の九九年、貯塔ゆえにかろうじて臨界を避けられていたにすぎない質量制限違反の七バッチを、形状制限のかけられていない沈殿槽に対して行ったため、とうとう臨界が起こったのである。

いちばん最初の工程違反のステンレスバケツの使用は、手作業でウランを硝酸に溶かすのであるから、被曝の危険、不快な臭い、皮膚や粘膜の荒れなど、可視的な健康問題もあったはずである。

この一連の工程変遷では、臨界安全も侵されていたが、そのような従業者の安全も損なわれていた。

「同調」「服従」「内面化」は、人が集団に従うときの、不本意さの程度に応じた用語である。もっとも不本意なのが服従である。不本意だという感覚がある限り、服従は服従以上にはなり得ず、「無責任の構造」も拡大はしない。他方、不本意ながら、従っているうちに、やがて、従っている不本意な行為の背景にある価値観を、自分の価値観として獲得してしまうことがある。それが内面化である。服従や同調から内面化が生じるプロセスが、少なくとも一握りの人たちの心に起こることによって、「無責任の構造」が推持されるのである。

権威主義

属人主義

同調性の克服は、究極には、個人が自身の知性と品性においてなさねばならない。

同調： アッシュの実験

サクラの誤答に同調する。

正解がはっきりしている課題では、同調が低い。

見通しのはっきりしない問題、善悪の判断のはっきりしない問題ほど、同調が起こりやすいことを意味している。

・・・

同調の高さと相関する性格要因として、場への依存性、権威主義的性格、被暗示性、承認欲求などがあげられる。

・・・

性格的要因以外には、一般に、女性のほうが男性よりも同調性が高く、教育経験の少ない人のほうが高い人よりも同調しやすいことなどがわかっている。

同調性の高い人＝風見鶏。こっちで賛成、対立意見にも賛成。

返報性を守ることが信頼関係を守ることにつながる。

服従： ミルグラムの実験

不本意ながらも電気ショック（サクラの被験者へ）のスイッチを押し続ける。服従率が高い。（通常よりはるかに拒否が容易な状態にもかかわらず）

内面化を、服従・同調と比べると、決定的に異なることが一つある。

服従は、強制力の源泉があってはじめて起こる現象である。同調は、モデルがあって起こる現象である。内面化は、当該の行動の背景となる価値観が習得されたため、強制力もモデルもなしに、行動が継続される現象である。

認知的不協和の原理

同一個人の中にある認知の一つが「X」という結論を含

意し、別の認知が「非X」を含意するとき、その二つの認知は不協和になると提唱し、それを認知的不協和と呼んだ。認知的不協和は不快な状態なので、認知的不協和をもつ個人は、その

二つの認知を調整して、**認知的不協和をなんとか小さくしようと努力する**であろうというのも彼の予測である。

・・・

認知的不協和を低減する方法として、**選択的情報接触**というものもあげられている。

たとえば、トヨタの車と日産の車を比較して、迷った後、かりにトヨタを買ったとする。買った後、「トヨタの車を買った」という認知と「日産のほうがよい選択肢だったかも知れない」という認知は、不協和となる。認知的不協和は不愉快な状態なので、人は、認知の調整によってその不協和を低減しようとする。この場合、「トヨタの車を買った」というほうはどうにもならないから、「日産のほうがよい**選択肢だったかも知れない**」という認知のほうを下げる工夫をすることになる。

「無責任の構造」と価値観内面化

ここで、「**時間の経過**」「**間接的な方法**」「**ひかえ目な報酬**」が大切な三要素である。時間が経過するうちに、「上もきちんと考えているのだろう」「自分の言ったことは、とりあえず意味があった」という具合に、「**黙ることにした**」ことへの**内的合理化**をし始めるからである。「**間接的な報酬**」は、自分が買収されたというような罪悪感を弱め、「自分は会社に（人材として）**買われているのだ**」という**自己認知**の材料となる。そして「ひかえ目な報酬」がそれらを内的価値として内面化させるのである。

このようにして、「無責任の構造」を内面化させた人は、次に自分と同様の問題提起をする人に、同じようなアプローチをする。

「君の言っていることは正しい。じつは、俺も、同じことを二年前に提起したのだよ。けれども、これは急には解決できない……」

「俺のアドバイスを聞け。それが結局君のためだということは俺がいちばんよく知っている……」

という具合である。なんのことはない、二年間、問題の解決に向けて具体的な努力が皆無であったことはさておいて、「**無責任の構造**」の手先に、いつの間にかなっているわけである。

このようななかで、報酬が極めて低かったり、報酬が、社長など上部の人の深々とした辞儀と「いや、君の誠意にはいつも感謝している」という程度の言葉であったりすることが、大切な役割を占めている。

用心すべきことがらである。

合理化への固執

ひかえ目な報酬のもとで「無責任の構造」を維持する人の心の中には、「そんな建て前ばかり言っても、（利益が出ないで）つぶれてしまっはしかたがない」「この程度の認可違反はどこでもやっていることだ」

というような合理化が、内面化のプロセスなどをおして維持されている。このような人の現状維持的能産は、しばしば、はじめからこのように思っていた人よりも頑強で感情的な形をとることが多い。というのも、頑強な主張によって、自分の心に残っている自分のもとの良心の声を押さえなければならぬからである。

集団の中での社会心理学的メカニズムのうち、社会的促進、社会的手抜き、リスクシフト、という三つの概要を紹介する。

社会的促進——他者がいることで刺激される行動

集団で攻撃的行動を起こすと、個人の場合より攻撃性が増すということがある。

社会的手抜き——他者がいることで行動が低下する

リスクシフト——集団の意思決定のほうが危険性が高い

少数の人にしか理解できないことは、たとえ重要なことであっても、その重要性が過小評価される可能性がある。

利得がプラスの場合、「何も手に入らない可能性が若干ある」というリスクを避ける方向が好まれるのである。これをリスク・アバースなバイアスと言っている。

・・・

利得がマイナスどうしの選択肢の場合、マイナスをゼロにできる可能性がある選択肢が選ばれやすい。・・・これを、チャレンジのバイアス、あるいは、冒険的バイアスと呼んでいる。この場合も、このバイアスによって合理的な選択肢が選ばれなくなる可能性を含んでいる。

~~~~~

averse 【形】ひどく嫌がっている、嫌って、反対して

~~~~~

権威主義とは、自分の考えや行動の基準を特定の外的権威に求めようとする考え方である。「ハイル・ヒットラー（ヒットラーのもとに栄光あれ）」のかけ声のもと、戦争に突入していったドイツファシズムは、その典型的な現れである。戦時の日本の軍部も、天皇の権威を戦争合理化のために利用していったと考えることができる。ここでは、「現政権の戦争への選択が正しいかどうか」という判断が、論理的にはその判断と無関係な権威への服従にすり替えられている。基準としての権威への依存が妥当な判断を保証しないところが問題である。

ファシスト傾向とは、政治的な意味の全体主義、右翼主義を指す言葉である。権威主義の高まりは、右翼的思想の高まりを伴うことが多い。

教条主義とは、ある特定の教義や

教条をいったん受け容れると、それがすべての善悪の判断基準になる傾向を言う。

(教条の異なる他者への不寛容や加罰傾向が生じる。)

因習主義とは、とにかく、古いものや前例にそったものがよくて妥当だという判断に固執する傾向である。

自民族中心主義とは、自分たちが、民族としてすぐれていると感情的に強く信じる傾向である。戦時ドイツの場合、アーリア民族という自覚のもとで、ドイツ民族の純血が強く信じられ、それが反ユダヤ主義のもとにもなったが、同時に、ドイツ人によるヨーロッパ支配を目指す合理化の理由にもなった。

~~~~~

自民族中心主義 エスノセントリズム ethnocentrism

~~~~~

因習的家庭観

因習的な家庭観や性役割観をもっていることが多いのも権威主義的人格の一つの特徴である。子どもは親に従うべきだ、子どもは親孝行するべきだ、女性は男性にかしづくべきだ、というのがその中心的な内容である。

形式主義

ものごとの正否を、そのことがらそのものによってではなく、形式的要件、手続き的要件によって判断しようという傾向である。

~~~~~

形式主義 フォーマリズム formalism

~~~~~

認知的複雑性の低い人は、対人認知において、自分自身の「好き嫌い」が基調となる。

~~~~~

認知的複雑性の低い人に、商品や提案のメリットとデメリットを丁寧に説明するとしよう。相手は、「それじゃ良いのか悪いのかわからないじゃないか。あんた、本当に売る気あるのか？」

~~~~~

あいまいさへの耐性の低い人は、複雑な事象をあいまいなまま認知することが苦手である。

「**場への依存性**」とは、ものごとを認知するにあたって、他律的な文脈の影書を強く受ける傾向である。

したがって、**権威主義的人格**そのものは、既述のように、教条主義、右翼主義、因習主義、自民族中心主義などの社会的要素を核とする人格特性であるが、多様なもの、複雑なもの、あ

いまいなものの認知能力の低さが根底になっている可能性があり、**自分の頭でものを考えずに、権威と関連する基準によって単純にものごとを判断しよう**という認知上の特徴を有している可能性が高いのである。

オール・オア・ナッシングの二分法的発想をする性格＝それは、**認知的分化度の低い**認知傾向にすぎない

加罰性

権威主義的人格の特徴の一つに、加罰性をあげることができる。自分の子どもに対する強い加罰性、部下に対する強い加罰性は、権威主義的人格を強く示唆する。

属人主義的情報処理の問題

- ① 案件の細部に対する注意が若干疎かになる。
- ② 反対意見が躊躇される度合いが高くなる。
- ③ 意見（支持）の「貸し借り」が起こる。
- ④ 新しい分野での判断に間違いが生じやすくなる。
- ⑤ 誤りが正しくくなる。
- ⑥ 対人情報への信頼過多が問題となる。
- ⑦ イエスマンが跋扈しり危険がある。
- ⑧ 組織としての自己評価、現状認識が甘くなる。
- ⑨ 無理な冒険を生む。

ホワイトカラーの仕事にとって、**広範囲の読書は、球技選手にとっての毎日の走り込みのようなもの**だと考えるべきである。野球やバスケットボールの選手でも「走り込みが球技の能力のどこに直接プラスになるのだろう」と疑問に思うことがかなりあるそうである。けれども、走り込みを維持する選手が、安定してよい成績を残すというのが、だいたい一致した意見である。

監査機構に、摘発と対処の両方の機能を付与すると、対処がやっかいなことを摘発しないという形の疲弊が起りやすい。また逆に、ありもしない問題があるかのようにして対処して責任を果たした形にするいわゆる「マッチポンプ」の問題も起りやすい。後者の問題が起ると、この部署の権限や機能が暴走する兆候のことが多い。

したがって、規範遵守の監査だけをもっぱらとする機関を作り、ある程度の件数の摘発をノルマとするような運営方法が望ましい。

現実**は複雑である。安易な善悪や是非の議論を受け付けないほど複雑である。その複雑性に屈服し、経済性、利益優先、効率追求、集団主義などの単線型の教条主義を便宜的な原則とすることになったまま、それが便法にすぎぬことを忘れ、便法への懐疑を圧殺するようになった**というのが、現代日本の「無責任の構造」の底流なのである。